

新卒採用・就職の今

大卒求人倍率の推移、採用・就職環境における企業と学生の概観は？

大卒求人倍率は1.78倍。売り手市場が続く

『ワークス大卒求人倍率調査』(リクルートワークス研究所、2017年4月26日発表・グラフ①)によると、2018年3月卒業予定の大学生・大学院生対象の大卒求人倍率は1.78倍と、前年の1.74倍とほぼ同水準だった。全国の民間企業の求人総数は、前年の73.4万人から75.5万人へと2.1万人増加し、バブル期(1992年卒・73.8万人)をしのぐ水準に。一方、学生の民間企業就職希望者数は、42.3万人と、前年42.2万人とほぼ同水

準だった。

大卒求人倍率は、企業の採用意欲が拡大した08年卒・09年卒では2.14倍に達したが、10年卒からリーマン・ショックの影響で急降下。しばらく低迷を続けた後、15年卒から回復傾向に転じた。

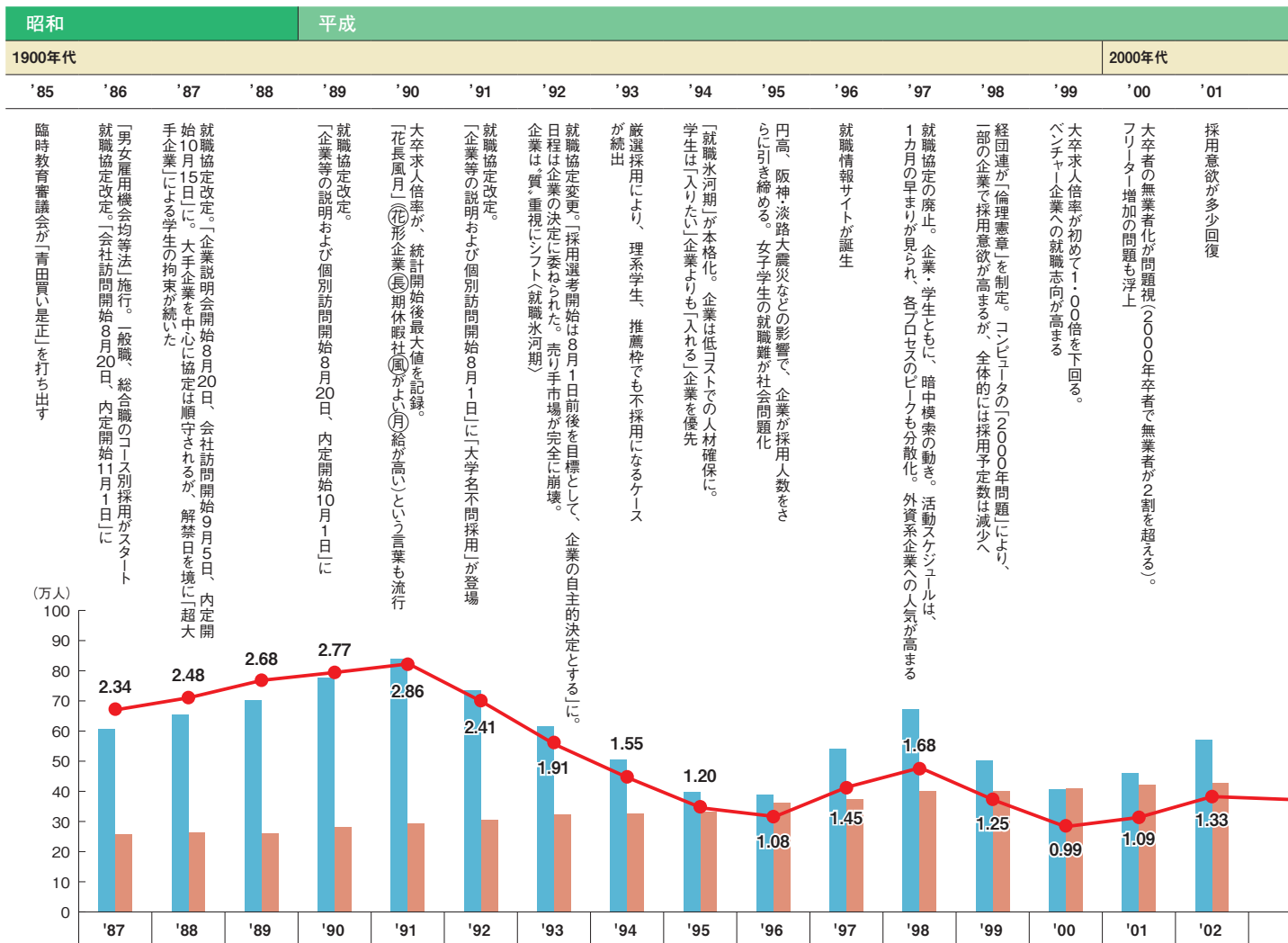
18年卒の求人倍率を従業員規模別に見よう。「300人未満」「300～999人」「1000～4999人」「5000人以上」の順に、6.45倍、1.45倍、1.02倍、0.39倍と、「300人未満」の中小企業が突出。前年の4.16倍から2.29ポイントの増加を示している。

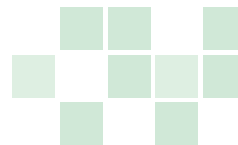
業種別で見ると、「流通業」「建設業」

「製造業」「サービス業・情報業」「金融業」の順に、11.32倍、9.41倍、2.04倍、0.44倍、0.19倍となっており、「流通業」と「建設業」の高さが際立っている。「流通業」は、前年の6.98倍から4.34ポイント、「建設業」は、前年の6.25倍から3.16ポイントの上昇と、急激に増加。一方で、「金融業」は、調査開始以来の最低水準だった14年卒の0.18倍に匹敵する低水準となっており、業種ごとの人材需給に差異が見られる。

中途採用市場では、17年の平均有効求人倍率(厚生労働省)は1.50倍(※1月30日発表)で、史上2番目の高水準。

① 新卒採用の歴史と大卒求人倍率・求人総数・民間企業就職希望者数の推移





労働市場のひっ迫が続いている。

マッチングプロセスが多様化し 学生のマインドにも変化が

新卒の採用活動において、企業が直面している課題にはさまざまなものがあるが、その大前提となるのが、昨今の「人材不足」。企業の多くがさまざまな手段を用いて人材獲得のために動いているため、マッチングプロセスは多様化している。中途採用で広く用いられる人材紹介、インターンシップによる学生との早期接触や、企業から学生にオファーする逆求人型採用など、今や多くの種類が見られる。加

えて、AI(人工知能)をはじめとするテクノロジーを活用した採用活動や人材育成、人事評価などの業務改善を行う「HRテック」は、“働き方改革”なども背景に広がり、その兆しを見せている。こうした変化については、Part3で詳述する。

一方学生側では、平均内定取得社数は増加し、それに伴い内定辞退率も高まった。加えて、「ブラック企業」という言葉に象徴されるように労働環境への関心が高く、ワーク・ライフ・バランスを重視する傾向があるのも、近年の学生の特徴だ。当研究所が17年5月に行った「働きたい組織の特徴(2018年卒)」の調査では、「仕事

と私生活のバランスを自分でコントロールできる」という項目が高い支持を得た。

このように、新卒採用市場では現在、人材囲い込み競争が激化していることを背景に、企業側においてはマッチングプロセスやツールの多様化が進み、学生側においては企業選定においてワーク・ライフ・バランスを今まで以上に重視しつつ、複数の内定先から入社企業を選ぶ、といった図式が見てとれる。こうした現状や政府の施策動向を踏まえつつ、2019年卒新卒採用の見通しと、これからの新卒採用市場の展望についても後のページで紹介したい。

※年表は、就職みらい研究所で作成

